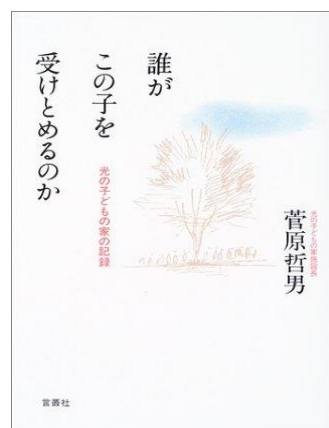


## 子どもは泣いて育ちます

加須市の「**光の子どもの家**」には、36人が暮していますが、みな**虐待**を受けて命からがら逃げ込んできた子どもだそうです。虐待の当事者の約6割が実の**母親**で、最も多い理由は「**泣き止まなかったから**」——でも2才未満の子どもは泣く以外の表現方法を持っていません。**子どもは泣いて育つ**のではないのでしょうか。

「子育ての中で、我が子に怒りを感じない親などいないでしょう。確かに虐待は**子育ての失敗**ですが、失敗に後悔してそこからどうしていくか。僕たちは親と一緒にそれを考える仲間になりたい。そして親子が再び一緒に暮せるようになることを目指しています。大事なものは親も子ども、**失敗しながら成長していくこと**です。」（菅原理事長）



秋葉原商店街の交差点にトラックで突っ込んで、大勢の人命を殺した被告は、子どもの頃、母が書いた作文や絵を学校に提出していたそうです。**親が先行**して子どもを引っ張っていく家庭では、子どもが**壊れて**しまいます。子どもがしくじったら「ああ、こんな失敗を出来るようになった」と喜んで欲しいです。

## どんなムッチちゃんも好きだよ

「担当の子どもには、思いっきり**えこひいき**して欲しい」と園長は頼んでいるそうです。「自分を特別な者として大切にしてくれる」という人が何時もそばに居てくれることで、自分は生きるに値するという**自尊心**や、他者を**思いやる心**が育ちます。

「**どんなムッチちゃんも好きだよ**」マツコさん（保育士）が繰り返し語りかけてくれる言葉で、ムッチちゃんは穏やかになっていきました。どんな時でも**自分を受け入れてくれる人**が傍に居てくれる——子どもはそれだけでいいのです。

けれども「それだけ」が実に難しいのですね。**愛情**とは何か特別なことをしてやったり、期待したりすることではなく、何でもない時間を共有し、**存在を受けとめること**なのです。

## お母さんのたからもの

“せんせい あのね

おかあさんの たからものは ぼくだって

おかあさんの たからものは

ぜったい ゆびわだと おもっていたけど

ゆびわは にばんめだった

ぼくが たからものになっちゃって こまるよ

たからものって はめたり つけたり

かけたり するものなのに

でも なんかいいきぶん

ぼくは そとへでて はしりまわったよ“

小学校1年生の詩です。読む者もなんだか走りまわりたくなってきます。素晴らしい詩ですね。「あなたはお母さんの宝ものよ」の一言が、こんなに幼子を喜ばすのです。この我が子の詩はお母さんの**終生の宝**となるでしょう。

## 助け合って育てる

「**子育ては母の手で**」の言葉が、育児に専念できない母親をどんなに苦しめてきたことか。そう強制された結果、不安を抱え、自分を否定し、**苛立ちや怒り**が目の子どもに向けられるケースも少なくない」と香山リカ精神科医は指摘しています。

その意味からも、**母の手を補う周囲の協力**が大切ですね。きめの細かい保育をしてくれる**保育士**の数をもっと増やす必要があります。それだけでなく、**友人**たちが家族連れで行き来する、**高齢者**に少し手を差し伸べていただく、**近隣**との付き合いを広げる等の努力も必要です。**閉鎖性**が強まるほど虐待の危険が強まるからです。

「光の子どもの家では**10才**になると、“なぜここに来ることになったのか”について丁寧に説明します（**真実告知**）。すると“なぜ自分が”という**葛藤**が始まります。そこで“**僕たちは君に会えてよかったよ**”という思いをシャワーもように伝えます。それが光の子どもの家の**養育の中心テーマ**です」

**18才**、進路が確定した子には「**生まれて来て良かったかい？**」とさりげなく聞きます。例外なく「当たり前じゃん！」と答えてくれます。**20才**になると「お父さんお母さんに**有難う**と言ってみたいと思うか」と聞きます。時期は母の日・

父の日のある6月頃です。これにはすぐに反応できません。でも後になって「本当は**一生に一度位**、有難うと言ってみたい」という返事が8～9割あるそうです。自分を虐待した親をふくめた**家族全体の受容**ですね。「子どもの頃に虐待を受けた人は、我が子を虐待する」。このような根拠の薄い理屈を乗り越える子育てをしていきたいものです。

“わたしの目には、あなたは高価で尊い。  
わたしはあなたを愛している” (聖書)